

# 湧き上がる、ありのままの輝きを

## 湖南ダンスカンパニー



公開ワークショップ(市民ホール)

昨年10月〜12月、「滋賀で人と文化芸術をつなぐプロジェクト『SANPOH』の一環として、市民ホールで湖南ダンスカンパニーのワークショップ「くらすダンス展」が開かれました。今回は、湖南ダンスカンパニーのダンスの魅力を取材しました。

### プロと障害者が創る 身体表現の芸術

湖南ダンスカンパニーで活動するダンサーは32人。このうち22人は知的障害のあるダンサーです。ワークショップでは、プロのダンサーとともに踊り、パフォーマンスを楽しんでいました。

湖南ダンスカンパニーは、障害のある人の身体表現のワークショップとして、守山市と野洲市の障害福祉施設のメンバーを中心に構成されています。『障害福祉の父』といわれる故糸賀一雄さんの遺徳を顕彰する「糸賀一雄記念音楽祭」に参加するため、18年前に結成されました。

今では、糸賀一雄記念音楽祭だけでなく、海外でも公演するダンスカンパニーグループに成長しました。

### 「ありのまま」が調和する 美しいダンスと出会った

プロダンサーで振付家でもある北村成美さんは、初めてメンバーと一緒に踊った時に衝撃を受けたそうです。

「決して人とぶつかることなく、自分のしたいように、ありのままに動いていました。それが、さまざまな要素が自然に調和する日本庭園のように、とても美しかったです。私にとっては『こんな人たちと一緒に踊りたい』と思う仲間と運命的に

巡り会えた瞬間でしたと、北村さんは湖南ダンスカンパニーのメンバーたちとの出会いを振り返っていました。

障害のあるダンサーに「練習」はありません。月2回のワークショップも、本番の大舞台も、すべての場面が彼らの「音楽祭」なのです。

北村さんがメンバーの視線の届く所で全力で踊って見せると、障害のあるメンバーも自由に踊り始めます。一人ひとりの習慣から振付を起し、その振付を踊ることを習慣化して、ありのままのエネルギーと輝きで新しい舞台を仕上げていきます。舞台美術や衣装も自分たちの手で一緒に作ります。

もちろん大舞台本番の雰囲気は格別。いつも以上に熱量が高くなります。初舞台から経験を重ねて、ダンスはメンバーのライフワークになっていきました。

### 新作「うみのプロードウェイ!!」 一人ひとりが輝くスターに

守山で開催された「くらすダンス展」では、新作ダンスで使う大道具、長さ18mの「びわこカーペット」の制作や展示、ス

タッフの制作秘話など、全6回の公開ワークショップが行われました。

巨大な「びわこカーペット」はびわ湖湖を渡る波をイメージして作られました。湖南のメンバーと近郊の幼児から大人までが一緒になって絵の具で色を乗せ、仕上げ、最終日に思いきり動かして「船出」しました。「びわこカーペット」を使った新作ダンス「うみのプロードウェイ!!」は、県立芸術劇場びわ湖ホール第20回糸賀一雄記念音楽祭「湖の生命」で初上演します。

湖南ダンスカンパニーは、これまで30人のダンサーが一斉に踊る作品を創ってきました。

コロナ禍により少人数のグループ活動を余儀なくされましたが、そのおかげで全員がソロダンサーとして進化し、スター集団になっていると感じているそうです。映画俳優たちが歩くレッドカーペットになぞらえて、湖から世界へと続くカーペットを湖南ダンサーたちが行進する新作には、「人は皆スター。その人にしかない素晴らしい才能がある。というメッセージが込められています」と話していました。



びわこカーペットの進水式(市民ホール)



プロダンサーで振付家の北村 成美さん

